



青山豊次・画

哲学堂・六賢臺
日本、中国、インド名2人ず
つの「賢人」を祀っている
中野区松ヶ丘1丁目

健友

第51号 2008年1月号

発行 医療法人社団健友会
中野・杉並健康友の会
〒164-0001 中野区中野 5-44-3
TEL 03-3387-3051 FAX 03-3388-1381
編集 「健友」編集委員会
ホームページアドレス www.kenyu-kai.or.jp/

～脳こうそく後遺症で片麻痺の夫80歳、支える妻79歳。寄り添って“今”を懸命に生きる～

もう一度住み慣れた我が家で暮らせる幸せ

たとえ病気で体が不自由になっても、住み慣れた我が家で暮らしたい……この願いをかなえるために、去年2月にリニューアルオープンした中野共立病院は在宅支援型の病院として療養病棟を開設し、リハビリテーション機能を高め、患者さんの自宅退院に向けた様々な取り組みを進めています。そして、在宅生活が始まるとき、診療所、ケアマネージャー、訪問看護師、ヘルパーなどが連携してさまざまなサポート体制をつくり、日常生活を支援していきます。

栗原天兔さん（80歳）は中野共立病院でリハビリを受け、片麻痺は残ったものの、無事自宅へ退院。様々なサポートと妻のアキさん（79歳）の介護によって自宅での生活が可能となりました。懸念に生きる2人の様子を紹介します。（編集部）



朝のリハビリで2人の1日が始まる



●自宅へ帰りたい

●自宅へ帰りたい

高齢になって病氣にたると、他の病氣を併発することがあります。手術から日後、天鬼さんは心原性脳こうそくを起しそうだ。その後症として左片痺瘻、構音障害が残りました。そのリハビリのため院に転院した。

の生活は一変しました。突然のことでも、果然どこで手術になり、戻ってきたら点滴の管が8本もついていました。あまりに大きくて、そのまま車の中でもうずっとまっていたのです。マヤさんはすぐに救急車を呼び、A病院へ。検査の結果、解離性大動脈瘤と診断されました。一刻を争う状態で緊急手術となりました。「10時間以上の手術になりました。」とマヤさん。この日の日を境に、2人の生活は一変しました。

オーブンしたことを聞いていました。
「それで電話をして、
入院することになったんです。病院が立ち上が
つっていたおかげで、本当に助かりました」
07年3月9日、中野共
立病院へリハビリ目的で
転入院。このときはまだ
歩けず車いすを使っていました。
トイレも介助が必要でした。視野狭窄があ
って左側が見えにくいため、車いすで移動する

A photograph of three elderly individuals—two women and one man—sitting together on a light-colored couch in a living room. The man, in the center, is wearing a light gray cardigan over a white button-down shirt. The woman on the left is wearing a dark vest over a maroon long-sleeved shirt. The woman on the right is wearing a patterned top. They are all smiling and appear to be engaged in a conversation. In the background, there's a window with a plant on the sill and a lamp hanging from the ceiling.

●突然

ところ、今度は胆のう炎に。その後も胆のう炎を再発して、一進一退の病状が続きました。

くと、天鬼さんは「自宅に帰りたい」と強く望むようになり、「違う病院でリハビリをしたい」と言い出しました。

持つようになりました。自宅へ帰って卓球をした。車にも乗りたい……。一人息子のKさんは地方で働いていますが、毎週のように見舞いに来て、父親の話題相手になり、母親を支えました。Kさんが「お父さん、車の運転はやめたほうがいいよ。僕がどうでも連れていくてあげるから」と言いつて、天鬼さんは「えへへへ」と照れくさそうに笑いました。

●支えられ
6月20日、ついに退院の日がやってきました。2人の生活が戻って少しつた頃、マキさんはビーズが利用できますからなんですよ。佐々木さんはその不安をしっかりと受け止め、「様々なサポートで支えられます」とおっしゃっていました。

支えられ

不整脈が出で 物忘れをひどくなりました。(結局 介護疲れが出てきました) ようでした」 着替えや食事など日常生活すべてにわたって介助が必要であります。夜もトイレの付き添いで2回は起きていました。1回のトイレで30分ばかり横になっていました。もぐらには眼れず、寝不覚状態が続いていたのです。「この先どうなるんだろうと考え出でと、気持ちが沈んでしまったんです。そんなときに佐々木さん

天兎さんの父親は岡利彦や山川均と親交があり、戦後は地元で新聞を発行するなど進取の精神に富んだ人だったそうです。その影響を受けた天兎さんは、体は不自由になりましたが、精神の自由、ユーモアのセンスは大事な配慮も入っています。

●2人の願い

面白いことを言つてはマキさんを笑わせます。それがマキさんへの“天鬼流感謝”なのです。

毎朝、マキさんは天鬼さんの動かなくなつた左腕のリハビリをします。そして、2人の1日が始まります。「皆さんに支えてもらひながら、これまで以上悪くならないように気をつけて、これからもう2人で仲良く暮らしていきたい」。それが2人の願いです。

性を知り、ついでに医療機関に連絡してきました。投与された患者は何も知られていなかった被害者です▼対象者はこの製剤の有効性が疑われた80年代以来、隆でも20万人、その内1万人以上が感染していると推定されています▼薬害肝炎訴訟原告団の要求は「被害者全員の一律救済」というあたりまでの要求です▼今年4月から後期高齢者医療制度がはじまります。

●介護の妻の不安

さんや訪問看護師さん、ヘルパーさんたちが入れ替わり立ち替わり来てくれて、どんなに支えられて、たかわかりません」

家族である対象者については半年の「凍結」を出していますが、一律で凍結することで制度そのものは何も変わらず、せん。「廃止・撤回」以外にはありません▼しかし困難な課題でも、薬事肝炎訴訟のように世論の力で国を動かすことは可能です▲いよいよ憲法を軸に医療崩壊を阻止し、医療・介護・福祉を守る闘いの正念場の年です。(吉)

よ高リツフ主日よて内以効対な者よ

